

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 08-026936
(43)Date of publication of application : 30.01.1996

(51)Int. CI. A61K 7/025

(21)Application number : 06-189978 (71)Applicant : KANEBO LTD
(22)Date of filing : 19.07.1994 (72)Inventor : SATOU NORIMASA
FUJIMOTO KATSUYUKI

(54) OILY LIP COAT

(57)Abstract:

PURPOSE: To obtain an oily lip coat capable of preventing rouge from migration to glass or earthenware cups.

CONSTITUTION: This oily lip coat is characterized by comprising (1) 90.0-98.0wt.% of at least one kind of dimethylpolysiloxane 10-300cSt in viscosity at 25° C and 2.0-10.0wt.% of silica. Another version of this lip coat is characterized by comprising (2) 75.0-93.0wt.% of at least one kind of the above dimethylpolysiloxane, 5.0-15.0wt.% of a volatile silicone, and 2.0-10.0wt.% of silica.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 01.10.1999

[Date of sending the examiner's decision
of rejection]

[Kind of final disposal of application
other than the examiner's decision of
rejection or application converted
registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number] 3197755

[Date of registration] 08.06.2001

[Number of appeal against examiner's
decision of rejection]

[Date of requesting appeal against
examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998, 2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平8-26936

(43)公開日 平成8年(1996)1月30日

(51)Int.Cl.⁶

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

A 6 1 K 7/025

審査請求 未請求 請求項の数2 F D (全 3 頁)

(21)出願番号 特願平6-189978

(22)出願日 平成6年(1994)7月19日

(71)出願人 000000952

鐘紡株式会社

東京都墨田区墨田五丁目17番4号

(72)発明者 佐藤 昇正

神奈川県小田原市寿町5丁目3番28号 鐘

紡株式会社化粧品研究所内

(72)発明者 藤本 克幸

神奈川県小田原市寿町5丁目3番28号 鐘

紡株式会社化粧品研究所内

(54)【発明の名称】 油性リップコート

(57)【要約】

【構成】①25℃における粘度が10～300c sであるジメチルポリシロキサン少なくとも一種90.0～98.0重量%と、無水ケイ酸2.0～10.0重量%とを配合することを特徴とする油性リップコート。②25℃における粘度が10～300c sであるジメチルポリシロキサンの少なくとも一種75.0～93.0重量%と、揮発性シリコーン5.0～15.0重量%と、無水ケイ酸2.0～10.0重量%とを配合することを特徴とする油性リップコート。

【効果】口紅がガラスや陶器製のカップへ色移りするのを防止する特徴を有する。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 25℃における粘度が10～300csであるジメチルポリシロキサン90.0～98.0重量%および無水ケイ酸2.0～10.0重量%からなる油性リップコート。

【請求項2】 25℃における粘度が10～300csであるジメチルポリシロキサン75.0～93.0重量%と、揮発性シリコン5.0～15.0重量%と、無水ケイ酸2.0～10.0重量%とからなる油性リップコート。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、口紅の上に塗布し、口紅がガラスや陶器製のカップへ色移りするのを防止する特徴を有する油性リップコートに関する。

【0002】

【従来の技術および発明が解決しようとする課題】口紅の上から塗布されるリップコートはその目的用途において、2タイプに分類される。すなわち、化粧効果を高める“つや”を付加するタイプと、化粧効果の持続性を高めることを目的とする、にじみや落ちを防止するタイプである。“つや”を付加するタイプは従来より多数商品化され汎用もされてきたが、化粧効果の持続性を高めることを目的とするタイプは種々提案されているにもかかわらず、商品化するには乾燥しやすいとか使用しにくいとか、あるいは化粧効果を損なう等の短所があり実用化レベルには至っていない。近年になり、特開平5-221829号公報および特開平6-24932号公報で提案された様なパーフルオロポリエーテル、アルキルシロキシシリケートの応用により前記欠点がかなり改良され商品化されてきた。パーフルオロポリエーテル、アルキルシロキシシリケートの共通した特徴は口紅の油と混和せず、著しく伸びが良くチキソトロピー性に優れることであり、その特徴を有するために口紅膜をほとんど損なうことなく塗布でき、パーフルオロポリエーテル、アルキルシロキシシリケートの薄膜を口紅上に形成し口紅の色移りやにじみを防止する効果を発揮している。しかし、これらの薄膜は唇が接触するものが温かい場合、コート剤の移行量が多くなる傾向があり、たとえばホットコーヒーを5口に分け呑むと最後にはコート剤の効果が消失し口紅は再度色移りするようになるという、熱に弱い欠点を有している。さらには、塗布後の時間経過に伴い前記両成分が口紅の油と混和しないため、徐々に剥落し効果が消失する傾向があり、熱に強く、効果時間が長いリップコート剤が強く望まれていた。

【0003】すなわち、本発明は口紅の上に塗布し、口紅がガラスや陶器製のカップへ色移りするのを防止する特徴を有する油性リップコートを提供することを目的としている。

【0004】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、このような実情に鑑み、化粧効果を高め、さらにその持続性をも高める油性リップコートがないものと鋭意研究を重ねた。その結果、口紅中に存在する0.1%前後の水分に着目し、この僅かな水分で口紅膜を柔軟に固化せしめるために無水ケイ酸が極めて有効であることを見出した。しかし、無水ケイ酸は飛散性が高い粉体で均一に直接口紅上に塗布するのはすこぶる使い勝手が悪い。そこで、口紅中の油成分と混和性の低い低粘度ジメチルポリシロキサン、あるいは低粘度ジメチルポリシロキサンと揮発性シリコンを媒体に使い、無水ケイ酸を口紅上に均一に塗布せしめることによって、この目的が達成されることを見いだして本発明を完成させるに至った。

【0005】すなわち、請求項1は、25℃における粘度が10～300csであるジメチルポリシロキサンの少なくとも1種90.0～98.0重量%と、無水ケイ酸2.0～10.0重量%とを配合することを特徴とする油性リップコートである。

【0006】また、請求項2は、25℃における粘度が10～300csであるジメチルポリシロキサン少なくとも1種75.0～93.0重量%と、揮発性シリコン5.0～15.0重量%と、無水ケイ酸2.0～10.0重量%とを配合することを特徴とする油性リップコートである。

【0007】以下、本発明の構成について詳述する。本発明に用いられる、25℃における粘度が10～300csであるジメチルポリシロキサンは公知の物質であり、その好適な配合量は98.0～75.0重量%である。25℃における粘度が10cs未満になると口紅中の油成分との相溶性が発現しコート剤と口紅が混ざり好ましくなく、300csを超えると塗布時の粘性により口紅膜を動かし、やはりコート剤と口紅が混ざってしまい好ましくない。

【0008】本発明に用いられる、揮発性シリコンは公知の物質であり、重合度0～5のジメチルポリシロキサン、重合度3～7の環状シリコンが包含される。その具体例を挙げると、たとえば、ヘキサメチルジシロキサン、オクタメチルトリシロキサン、デカメチルトetraシロキサン、ヘキサデカメチルヘプタシロキサン、ヘキサメチルシクロトリシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、テトラデカメチルシクロヘプタシロキサン等があり、これらの好適な配合量は5.0～15.0重量%である。

【0009】本発明に用いられる、無水ケイ酸は公知の物質であり、その好適な配合量は2.0～10.0重量%である。配合量が2.0重量%未満の場合、口紅の種類によっては効果が発現されない場合が生じることがあり、10.0重量%を超えると、きしみや乾燥感等の異和感を感じやすくなり好ましくない。

【0010】本発明の油性リップコートには、本発明の

目的を損なわない範囲で前記の必須成分以外に微量の無機着色剤、天然あるいは合成色素、タルク、マイカ等の白色粉体を配合することができる。

【0011】

【実施例】以下、実施例および比較例を挙げ、本発明を具体的に示すが、本発明はこれらに限定されるものではない。なお、実施例の評価方法は下記の通りである。

【0012】（評価方法）女性パネラー20名を用い、それぞれ口紅を塗布した後、さらにリップコートを使用させた。約1時間後にガラスあるいは白色陶器製のカップ中の暖かいコーヒーまたは紅茶を飲ませ、カップへの色移りの度合いを目視にて判定した。

【0013】（実施例1）25℃における粘度が20csのジメチルポリシロキサン96.0重量%に無水ケイ酸4.0重量%を加え、粗撹拌した後にローラーにかけ混合粉碎し、油性リップコートを得た。

【0014】（実施例2）25℃における粘度が10csと300csのジメチルポリシロキサンを、それぞれ60.0重量%と30.0重量%に、無水ケイ酸10.0重量%を加え、粗撹拌した後にローラーにかけ混合粉碎し、油性リップコートを得た。

【0015】（比較例1）25℃における粘度が20csのジメチルポリシロキサン100重量%単独のものである。

【0016】（比較例2）25℃における粘度が10csと300csのジメチルポリシロキサンをそれぞれ60.0重量%と40.0重量%とを単純混合したものである。

【0017】（特性）実施例1および2は20名全員が

全くカップに色移りすることがなく、比較例1および2は20名全員色移りするという結果を得た。

【0018】（実施例3）25℃における粘度が20csのジメチルポリシロキサン86.0重量%に無水ケイ酸4.0重量%を加え、ローラーにかけた後、デカメチルシクロペンタシロキサン10.0重量%を加え、油性リップコートを得た。

【0019】（実施例4）25℃における粘度が10csと300csのジメチルポリシロキサンをそれぞれ55.0重量%と30.0重量%に、無水ケイ酸10.0重量%を加え、ローラーにかけた後、ヘキサメチルジシロキサン5.0重量%を加え、油性リップコートを得た。

【0020】（比較例3）25℃における粘度が20csのジメチルポリシロキサン90重量%と、オクタメチルシクロテトラシロキサン10.0重量%を単純混合したものである。

【0021】（比較例4）25℃における粘度が10csと300csのジメチルポリシロキサンをそれぞれ55.0重量%と40.0重量%と、オクタメチルトリシロキサン5.0重量%を単純混合したものである。

【0022】（特性）実施例3および4は20名全員が全くカップに色移りすることがなく、比較例3および4は20名全員色移りするという結果を得た。

【0023】

【発明の効果】以上記載のごとく、本発明は、口紅がガラスや陶器製のカップへ色移りするのを防止する優れた有用なる油性リップコートを提供することは明らかである。